

居の子ども二人が50%台で、50歳代になると同居の子ども二人世帯は減少し始め、子ども一人または0人が増え、60歳代、70歳以上では子どもの自立が顕著に現れる。今回の調査では、孫世代の同居の有無がわからないが、60歳代では子ども夫婦との同居と思われる世帯が12.9%ある。また子ども一人が同居する世帯が60歳代では26.7%、70歳以上では11.8%あり、子世代の晩婚化等が推測される。

同居家族のなかの子どもの学齢期の分布状況(図5)も、前述の傾向に対応している。同居の子どもは、30歳代～40歳代では小学生・中学生が増加するが50歳代では減少が顕著となり、40歳代～50歳代では高校生・大学生が増えるものの、60歳代には学齢期の子どもはほとんどいなくなる。これに対応して増加しているのが成人であり、回答者が60歳代の世帯では子どもは成人が95.8%を占める。70歳以上で小学生・中学生が同居者にあるのは(14.3%)、孫世代がカウントされているものと推測される。

図5 年代別に見た子どもの学齢期

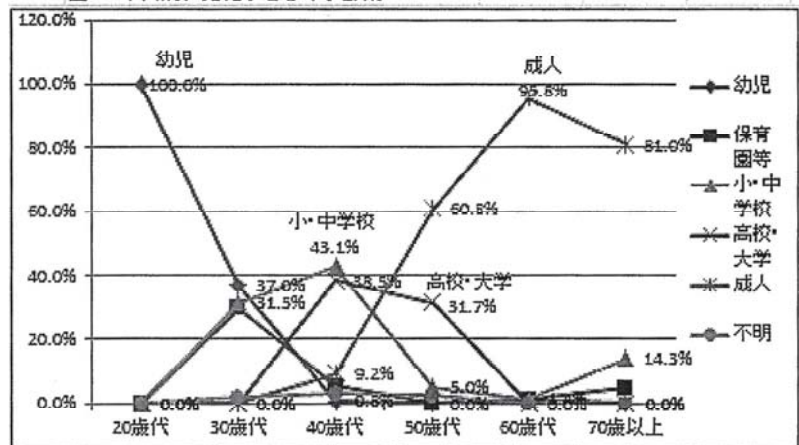
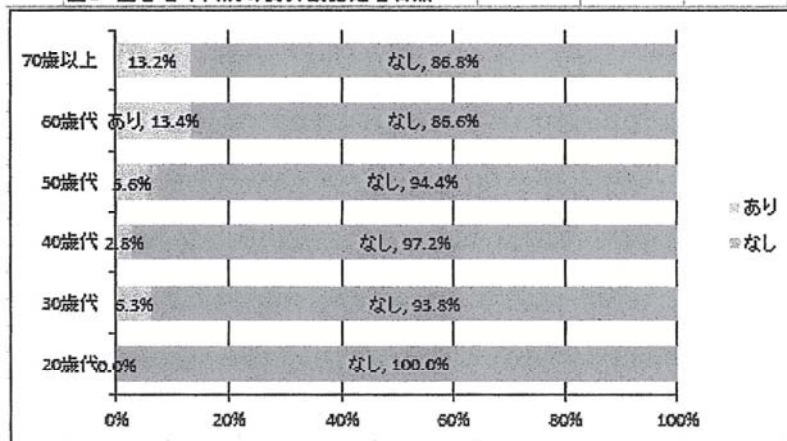


図6 回答者年代別の要介護認定者有無

ウ 家族のなかの要介護者の有無

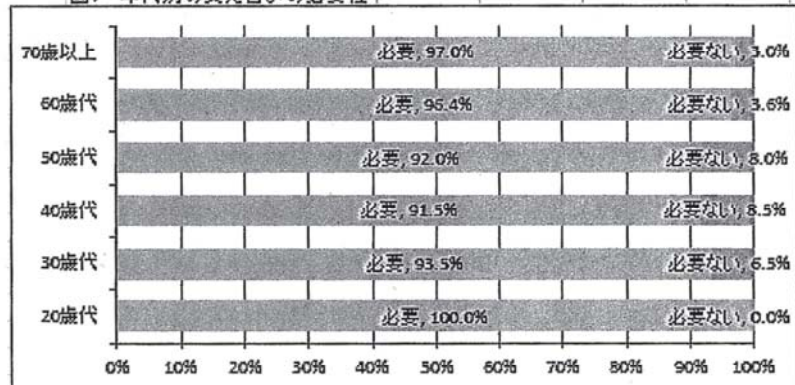
要介護認定者の有無は(図6)、回答者の年代により異なり、70歳以上では13.2%、60歳代以上では13.4%となった。要介護認定者が、本人またはその配偶者か、同居の親世代かは確定できないが、50歳代で5.6%、40歳代でも2.8%、30歳代で6.3%は要介護者は親世代と推測できるので、家族に要介護者を抱える世帯は、かなり広い世代にわたって存在していることが確認できる。



② 地域での支え合いに関して ア 地域での支え合いの必要性

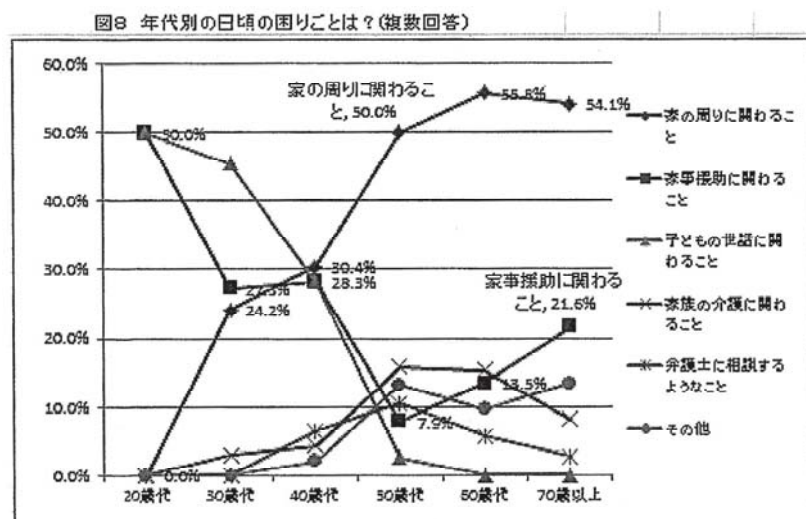
回答者の年代にかかわらず、90%以上が地域での支え合いが必要と回答している(図7)。

図7 年代別の支え合いの必要性



イ 日頃どのようなことにお困りですか？

日頃の困りごとについては、回答者の年代によって異なった結果が得られた(図8)。30歳代、40歳代では子どもの世話に関わることが多く、50歳代以上では、ほぼなくなる。家事援助に関わる困りごとは、30歳代、40歳代で30%弱あり、50歳代で一端は減少したあと、60歳代、70歳以上では増加する。家事援助の困りごと、年代によりその内容は異なることが予想される。



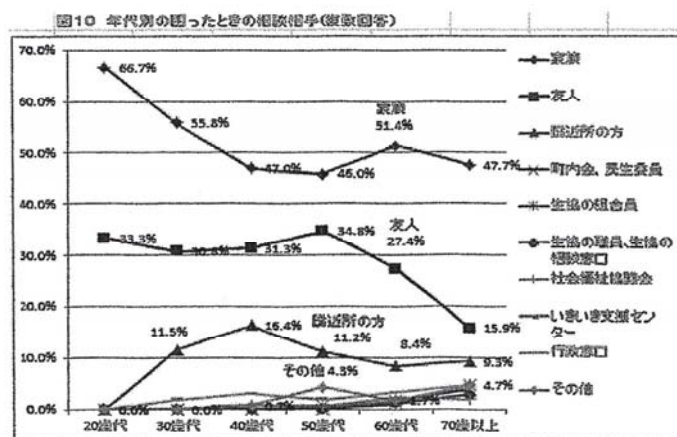
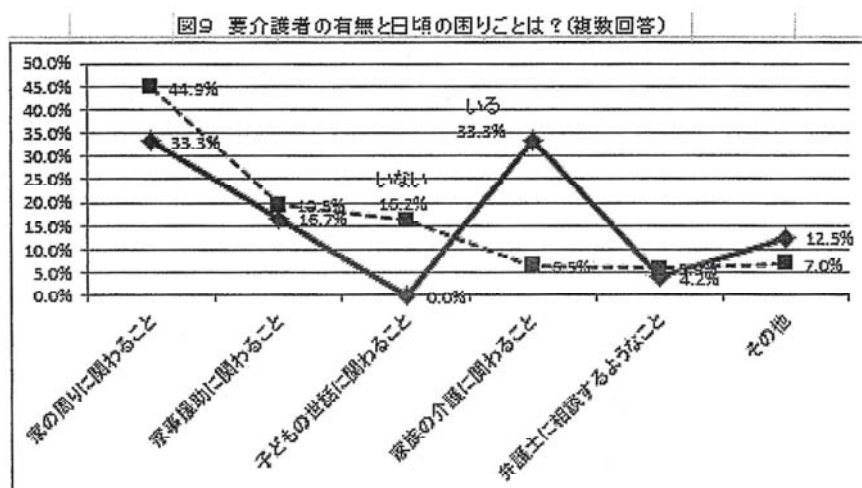
上では増加する。家事援助の困りごと、年代によりその内容は異なることが予想される。

各年代を通して増加しているのは家の周りに関わること、50歳代以上では半数以上が困りごとに挙げている。庭の手入れ、住まいの修理など家の周りの些細なことが、日頃の困りごとにあがってくる実態にどのように対応したら良いかは、地域の大きな課題と思われる。

また家族の介護に関わる困りごと

とは、50歳代・60歳代で高くなり、親世代の介護への対応が、現実の困りごとに挙がってくる年代であることがわかる。

要介護者の有無による困りごとの差異は大きくはなく(図9)、日常生活における困りごとのレベルでは、要介護者の有無に拘わらず、共通してある困りごとであることを意味していると考えられる。要介護者を持つ家庭では、当然ながら家族の介護に関わることの割合が高まる。



ウ 困りごとがあった場合、どなたに相談されますか？

困ったときの相談相手については(図10)、回答者の年代を通し「家族」が高い比率を占めた。友人を相談相手とするとの回答は、20歳代～50歳代を通して30%台となり、これは60歳代、70歳代と